やぶれさる探偵

推理小説のポストモダン

ステファーノ・ターニ　高山 宏/訳

THE DOOMED DETECTIVE
The Contribution of the Detective Novel
to Postmodern American and Italian Fiction

やぶれさる探偵

江苏工业学院图书馆
藏书章

推理小説のポストモダン

THE DOOMED DETECTIVE

●訳者紹介 ―――――― 髙山 宏(たかやま ひろし)
1972年　東京大学文学部卒業
　　同大学大学院修士課程修了
現　在　東京都立大学助教授

〔著書〕「アリス狩り」「目の中の劇場」「メデューサの知」
「ふたつの世紀末」(以上青土社)
「パラダイム・ヒストリー」(河出書房新社)
「黒に染める」(ありな書房)
「世紀末異観」(三省堂)
〔訳書〕「ルイス・キャロルの生涯」「鏡の国のアリス」
「月世界旅行」「シャーロック・ホームズの光と影」(共訳)
「シャーロック・ホームズが誤診する」(以上東京図書)
「ノンセンスの領域」「キャロル大魔法館」
(以上河出書房新社)
「道化と笏杖」(晶文社)
「夜の勝利/上・下」「月世界への旅」(以上国書刊行会)
「美と科学のインターフェイス」「愚者の知恵」
「世界を映す鏡」(共訳)(以上平凡社)
「人間喜劇」「〈魔〉のドラマトゥルギー」(共訳)
「ちょっと見るだけ」(以上ありな書房)
「おとぎの"アリス"」(ほるぷ出版)

やぶれさる探偵　推理小説のポストモダン

Printed in Japan

1990年7月25日　第1刷発行
●著者 ――― ステファーノ・ターニ
●訳者 ――― 髙山 宏
●発行 ――― 東京図書株式会社
〒112 東京都文京区水道2-5-22
Tel.(03)814-7818/814-7819
振替　東京　4-13803

ISBN4-489-00331-5

●ブックデザイン——磯田和一

5 メタフィクショナルな反-探偵小説 —— 173
イータロ・カルヴィーノ『冬の夜ひとりの旅人が』 —— 176
ウラジーミル・ナボコフ『青白い炎』 —— 205
6 探偵は自由の身に —— 225
原注
文献
索引
解題 ── 頭がリゾーム

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

序章 —— 1

1 探偵小説の発展、そして反-探偵小説の出現 —— 9

2 反-探偵小説を定義する —— 61

3 革新的な反-探偵小説 —— 83

レオナルド・シャーシャ『人にそれぞれのものを』 —— 86

ジョン・ガードナー『太陽の対話』 —— 99

ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』 —— 107

4 脱構築的な反-探偵小説 —— 119

レオナルド・シャーシャ『あらゆる点で』 —— 123

トマス・ピンチョン『競売ナンバー四十九の叫び』 —— 142

ウィリアム・ヒョーツバーグ『堕ちる天使』 —— 153

序章

Introduction

その誕生のそもそもの始めから一九五〇年代という時期にいたるまで、探偵小説は取るに足らぬ小説形式とみなされていたのである。E・A・ポーの「モルグ街の殺人」の発表をもって探偵小説が出現するやいなや、たとえばディケンズとかドストエフスキーとかいった「純」文学の作家たちが探偵小説の仕掛けをいろいろと利用し始めたわけだが、そもそも人物造形の深みだの何か重大な主題だのといったものにはまるで無関心な探偵小説の「真正派」は一度として自ら芸術を気どったこともなければ、また芸術とみなされたこともなかった。それはたとえば頭の体操として【英国派】、あるいは男性の現実逃避として【のちのアメリカの「ハードボイルド」派】、一途に大衆に娯楽を供してきたのだ。そうしているうちにフランスに実存主義が現われ、第二次世界大戦の折りとあって爆発的に流行した。すなわち、これはとくにフランスの地下での動きだったわけだが、およそ人間たるもの、いつ何時、自らを自由に定義し、自在に再定義し【自らの「本質」を主張し】てもかまわないとする感じ方が現実的によしとされた。人は本質的に「不条理」な宇宙の中では自らの選びとったものになれるし、またなれなければならないとする感覚の瀰漫する時代が到来したのである。するとダシール・ハメットやレイモンド・チャンドラーといった作家たちのひねりだした私立探偵、というか神話的な私立探偵が突如として時代のインテリの英雄となった。混沌と危険に満ちた世界にてきぱきと対処していく能力をそなえた存在、というわけだった。実際、この英雄は兵士の位置にとって代わったのだ。彼がこうして表舞台で脚光を浴びるようになった時機は、それが【彼をジャン・ポール・サルトルが「実存主義的英雄」と呼んだ、あの】一九四〇年代後半の戦争への幻滅の時機と、そしてアメリカ人にとって第二次大戦の栄光――それは既にしていかがわしいものと感じられ始めていた――がすっかり色あせて冷戦の重苦しい悪夢に変わってしまっていた五〇年代前半の時機とに重なっていることを考え併せてみると、なかなかに意味深長ではないか。私立探偵は一緒に戦ってくれる、ともかくも彼の信用に足るだけのいかなる軍

隊ももはや持たず、いかなる高邁な道徳的大義名分ももはや持たない。彼の仕事といえば淡々と靴をすり減らし、淡々と犯罪者を割りだしていくことだけ。犯された法の味方であるかどうかさえ問題ではない。

彼に目をつけた神話化好きの実存主義者たちが気づいていたようには思えないが、私立探偵は中産階級がやろうとしていた企業活動のモデルとなっていった。われとわが力だけを頼りに殺し屋の軍団をやっつけるというわけだ。実際、彼は一九六一年までにアイゼンハワー大統領その人までが「産軍協同体」と公然と呼びつつあったもののために圧しひしがれ、自分のアイデンティティを奪われてしまっていた中産階級のための復讐者となった。中産階級のエートスはあくまで個人的企業をよしとする気概にもとづくものであり、国家制度としては既に信用の薄らいでしまった国軍を思いださせぬでもない国家制度としての警察に対して個人企業の側が返した応答、それがすなわち私立探偵なのである【その時代の雰囲気一般を知りたければ『裸者と死者』『スローターハウス5』、そして映画なら『戦場にかける橋』を思いだせばよい。広島、長崎に対する戦略的にはおかしいことだらけの原爆攻撃を含め、アメリカによる空襲が不必要だったのではないかということが、この頃までには随分広く知られていたのである】。こうして一九五〇年代までには探偵小説はハードボイルドというアメリカふうの形をとって文学の表舞台に躍り出てきた。ダシール・ハメットは文学者として押しも押されもせぬメジャーとなったし、『罠』【一九六二】のジョン・ホークスがそうだが、だれが見ても「純」文学の作家である若い作家たちが私立探偵の世界をアイロニーに満ちた複雑な文学作品の世界に変える作業をさかんにやり始めた。一九六〇年代前半までには学者たちが、重要なものということで探偵小説の研究に乗りだしつつあったが、そう長続きはしなかった。真正の探偵小説はほとんど例外なく本格的芸術のものというよりは手のこんだ匠みのものなのだが、探偵小説のいろいろな機巧が、もっと野心的でもっと「文学的」な小説のための足掛りとしてごく普通に使われ始めかけていたのである。

さて私が本書の主題として探偵小説をとりあげるのは、その構造と内的な意味合いがポストモダンの感覚によって根底的に変化させられたということがあるからなのである。あとの章で見ていくことになるはずだが、ポストモダニズムの明々白々な特徴をふたつあげると脱-構造【de-structuring】と非-象徴的【asymbolic】ということがあげられるだろう。であればこそポストモダニズムは、高度な構造を持ち象徴的でもある探偵小説の中に、自分の介入を今か今かと待ち望み、いったん介入した場合にもそれによって引き起こされる変化の証(あか)しを他のどんなテクストよりも鮮やかに示してくれるはずの伝統的ジャンルを見出すことになる。こうして、探偵小説がポストモダニズムによって変化をこうむった結果のその「何か他のもの」と相対してみることで、ポストモダニズムを口ざわりがいい割りには実体のない理論的定義としてではなく、現に機能している現場において完璧にこれを眺めることができるはずなのだ。こうすることでポストモダニズムの関心事は一層表明化し、具体的な展開の場を得てもっとずっとはっきり目に見えるものとなるだろう。

最近の純文学作家がいかに探偵小説の約束事を用いつつ探偵小説と全くちがったものをつくりだしているのか、そしてこの「何か他のもの」がいかにポストモダニズムの文学的パノラマの中にぴったりとおさまるものであるか、それを本書は描きだそうとする。ちゃんと議論するために、まずは形式の上で、また社会的にみて探偵小説とはそもそも何であるのか、どういうふうに発展してき、そして今どういう方向に発展中のように見えるか、を述べることにする。探偵小説史を手短にやってみるが、そうすることでごく最近の状況がよくわかってくるだろう。それから新旧の探偵小説をつなぐはっきりしたパターンや文体をいろいろと検討してみたい。

こうした文脈で探偵小説の変性とその最終的な転倒を研究しようとすれば、アメリカとイタリアを標的にするのが至当である。アメリカを選ぼうというのは、そもそもだれしも知るようにこのジャンル発祥の地がアメリカ

であり、かつ探偵小説の伝統がその歴史的発展の段階を残らず験してきたという点でもイギリス以上の国だからである【まずポー。次にヴァン・ダインからエラリー・クィーンにいたる古典的な推理もの探偵小説。そしてハードボイルド。そして最近のスリラー、犯罪もの、スパイものといった大衆小説の頽廃形式まで】。一方、イタリアがおもしろいというのはこれとは逆の理由からである。この国では探偵小説は、はっきりした形ではやっと一九二九年に初めて活字になったというにすぎない輸入ジャンルなのである。しかしイタリア探偵小説界はついにはアメリカのそれと雁行しつつ、このジャンルのポストモダン的変種の最もめざましい作品のいくつかを世に送りだすことになったのである。そのあたりの経緯を少しだけ述べておこう。

一九二九年まで、探偵小説という概念自体、イタリアには存在しなかった。英国産のミステリー作品が時々思いついたようにパルプ雑誌に連載されたり、二流の出版社から「冒険もの」という形にして出されたりという程度だったのである。一九二九年に、声望ある大手出版社モンダドーリが英国製ミステリーを公的にイタリア市場に供給しようとした時点をもって、教養ある広汎な読者層の探偵小説ジャンルへの開眼という事態がやっと生じたのである。三〇年代、英国製ミステリーは大いに読まれたのに、アメリカのハードボイルドの探偵小説は、当時アメリカ小説一般がそうであったように、文学的禁輸の厚い壁に阻まれていた。そしてついに一九四一年から四三年まで、ファシスト検閲当局はあらゆる種類の探偵小説が出回ることをまず制限し、やがて全面禁止する。あれやこれやで、アメリカのハードボイルド探偵小説のイタリア上陸はやっと第二次大戦のあとということになる。してみるとイタリアが探偵小説に開眼したのは非常に遅かったことになり、しかも相手はほとんど英国的伝統一本に限られていたことになる。この英国的伝統は、こちらはこちらでポー起源のひた押しに推理を押していくタイプの探偵小説を磨きあげてきていた。結果、イタリア人作家にとって探偵小説と言えばまずこちらの伝統

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

に棹さすものであった。あとから入ってき、しかもはっきりちがった特徴をいろいろそなえたハードボイルドは全然別もの、アメリカ産の異種というふうに考えられていた。イタリア人作家たちが最近「文学的」な探偵小説を書きだそうとした時、ハードボイルドではなくてもっぱら重厚で伝統的な英国産ミステリーに範を求めたというのもひたすらそのためなのである。

文学的ないしポストモダンの探偵小説を検討するに当たって私は英米圏の探偵小説小史をかかげようと思うが、この形式にイタリア人たちが加えた再定義がこれをもとに分析できるはずだからである。そうしておいてからイタリア探偵小説の起源と展開の見取り図を描いてみることにする。フランスにおける探偵小説の発達については議論しないが、なぜかと言えばフランスの作家たちはそもそもの出発点から、そして一般的になおハードボイルド・タイプの探偵小説とその「実存主義的」眷族【たとえばヘミングウェイの小説など】の方に惹かれ続けているからである。それに反して、シャーシャのようなイタリア人作家は三〇年代イタリアで一度大きな人気をえていた頭を使う推理型、「ポー風」な探偵小説をとりあげ、うまくこなしながら、いま直接、ポストモダン・スタイルないしメタフィクショナル・スタイルに突入中である。こうして、ひとことで言えば私はポー風探偵小説と、ポーが称揚した合理性にイタリア人作家たちが加えた逆転との関係を議論しようと思うのである。実存主義派その他の人々に言わせれば狭い結論に自らを追いこんでいく合理のゲームでしかないはずのポー風探偵小説やその英国において磨きあげられた形式【たとえばアガサ・クリスティが書いた古いスタイルのミステリー】がなお意気さかんであることがわかる。というのは、その基本的なパターンに巧妙に手が加えられたところからイタリア現代小説の最良の作品のいくつかがうみだされているからであり【シャーシャの『人にそれぞれのものを』やエーコの『薔薇の名前』など】、もっと大きな観点から言えば今まさに展開中の最も重要な文学運動のひとつさえうみだされているからである。ボル

ヘス、ジョン・バースからカルヴィーノまでといった作家たちの、アイロニーの勝った知的小説の流行に現われたポストモダニズムの動向がそれである。

イタリア小説は、エミーリオ・ガッダの草分け的寄与【『メルラーナ街の惨劇』一九四六】、あるいはもっと最近のシャーシャ、エーコ、カルヴィーノなどの寄与によって、私が試みに「文学的」探偵小説と名づけてみたものの、すなわち見たところ袋小路に迷いこんだ英国ミステリーの合理性を再形成してなにやらきわめてオリジナルな「何か他のもの」に変成するポストモダンな【諸】形式の、最突出部分である気配だ。この「何か他のもの」こそ私が反-探偵小説として論じようとするところの、普通の探偵小説の定石を裏切ることで読者を刺激もし、いらだたせもする高度にパロディ的な形式であるに他ならない。この近年の反-探偵小説現象がいかに広汎なものであるか、探偵小説の伝統と呼べるようなものをほとんど持たず、それ故、もっぱらポー風のモデルについて腕を磨くしかなかったひとつの国――イタリア――の作家たちをそれがいかに巻きこんで、驚くべくポストモダンな作品群をうませるにいたったか、私の関心はそれを描きだしてみることにある。

こうしてアメリカとイタリアというふたつの国は――アメリカは探偵小説の伝統の長さのどんづまりの結果として、イタリアはまさにそうした伝統の欠如の故に――たしかに巨視的に見れば文学の領域で両者をつなぐことができそうにもないちがいが多々あるにもかかわらず、ともかく反-探偵小説をうみだすにいたった。そう聞いても別に驚くには当たらないだろう。なぜならこうした小説は国家の状況にばかりではなくて、第二次世界大戦後西欧文化に瀰漫(びまん)した危機と混沌の感覚にも直接関係があるからなのである。朝鮮動乱の五〇年代、ヴェトナム戦争と景気後退のきざしの六〇年代、アメリカ合衆国自体がアイデンティティ・クライシスに見舞われたが、私がアメリカにおける反-探偵小説の最初の作品群を確認するのがまさにこの時代のことである。【アメリカで既にハー

ドボイルド・タイプにお株を奪われ始めていた頃にやっとイタリアに輸入されてきた】英国探偵小説の場合とそっくりで、経済的活況と短い社会的安定と繁栄の季節が、まったく同じ現象にアメリカ人が「否」をつきつけ始めていた同じ時に、イタリアではやっと始まりつつあったのである【六〇年代初めのイタリア人のいわゆる「経済の奇跡」の季節のことだ】。もちろんこの繁栄は永続きせず、イタリアはここでもまた早々とアメリカに追いついてしまう。一九六八年の政治的社会的危機と工業社会の全般的退潮はどの他の西欧諸国よりも深刻にイタリアを強撃したのであり、そしてその時代固有の広汎に広がった不安と混沌の感覚をみごとに作品化したのが反-探偵小説のポストモダン的表現に長けた何人かの時代通の作家たちだったことになる。

こうしてアメリカとイタリアの反-探偵小説を仔細に研究するうちに、探偵小説の領域でお互い非常に異なった背景を持ちながらついに同じ地点に行き着き、ポストモダン的表現の一形式として反-探偵小説を前面に押しだすにいたったふたつの国を通して、探偵小説の伝統とポストモダニズム文学を結びつけることができるのである。その結果、ポストモダニズムがいかに広汎な広がりを持つものかが納得でき、どこか一国の文学に限定されるものではありえないということも諒解されるだろう。過去二十年間、文学と大衆文化の双方において、あらゆる西欧諸国の趣味と思考を統一しさったこれほどの公用語は他にはなかった。

こうして反-推理小説は、多元的な関心が――伝統とポストモダニズムが、大衆文化と高級文化が、イタリアとアメリカが、イタリア／アメリカと西欧社会が切り結ぶめざましい交叉点となる。終りの感覚かもしくは新しい始まりの感覚が、核の時代とその後に来るものの間の、合理と神秘の間の昏い闇が、こうした反-探偵小説の研究を通じて明かるまされていくだろう。解けざる謎と敗れさる探偵が、人間とその限界をめぐるもっと楽天的ではないにしろもっとずっと成熟した感覚に出会う交叉点、それこそが反-探偵小説であるからだ。

1 探偵小説の発展、そして反-探偵小説の出現

The Development of the Detective Novel and the Rise of the Anti-Detective Novel

ポーが切りひらき，ポーが行く道。それはどこに行こうとしているのか。「ハイ・ブリッジを行くエドガー・アラン・ポー」

探偵小説の起源ということになればオイディプース神話やギリシア悲劇や聖書、それにエジプトの物語などにさかのぼって考えることもできるわけだが、しかしそもそも自らを意識し、自らの約束事に自意識を持つ形式をジャンルという名で呼ぶのだとすると、探偵小説ジャンルの公式な誕生は一八四一年『グレアム・マガジン』誌にエドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」が発表された時ということになる。「マリー・ロジェの謎」【一八四二】、「盗まれた手紙」【一八四五】がすぐあとに続いた。探偵小説の起源を旧約聖書の名裁判官ダニエルが活躍する『ダニエル書』に求めたりするよりは、このポーの作品の中で融け合い、このジャンルのその後のいかなる展開場面にあっても一貫して基本であり続けている十八世紀文学のふたつの主要な流れにしっかりと焦点を定めてみるほうが裨益するところ大であるように思われる★1。このふたつは大雑把に知的志向、そして民衆的志向と名づけてよいもので、それぞれヴォルテールの『ザディグ』のような作品と典型的なゴシック小説に反映されている。一方は概して静的で、理づめで、哲学的であり、もう一方は冒険好きで、気分的で、情緒的なサスペンスに満ちている。もちろん知的な流れも「民衆的な」流れもいつだって文学の中にはあるわけだし、第一ひとつの作品にこの両方が共存することだって少なくない。しかしながら探偵小説の出現という観点に立って見たければ、勝れて合理的な時期、「啓蒙の時代」に、理性的なものに魅惑されながら狂気にただならぬ関心を示した文化的パラドックスの時代、ジョンソン博士のような個々人の生きざまにそっくり体現されることの少なくなかったそうしたパラドックスの時代に、議論を集中するほうが実はあがるのではあるまいか。十八世紀後半という時代はフランス百科全書の時代でありながらゴシック小説の時代であり、カント流の知的観念主義の時代でありながら、「疾風怒濤」の時代でもあった。一七四八年、ヴォルテールは短篇小説『ザディグ、あるいは運命』を出して、主人公ザディグその人の性格の中に一種の原-探偵像を描きだしてみせた。とにかく純粋な

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com